

# 最先端研究を発表

## 左京で希少難病フォーラム



病名が判明しないなど国の難病対策から外れている希少難病患者を支援するNPO法人「希少難病患者支援事務局（SORRD・ソルド）」主催の「希少難病フォーラム」が6日、京都市左京区の国立京

都国際会館であり、ソルドが今月から始めた人工多能性幹細胞（iPS細胞）の作成やゲノムの解析など、最先端医療を活用した研究事業が発表された。

難病患者ら約110人が参加。東海大医学部と連携して患者の血液からさまざまな細胞に生まれ変わるとされるiPS細胞を作り、国内外の研究者に提供して治療薬の開発などに生かす「iPSバンク事業」のほか、国立遺伝学研究所と協力して患者の血液内のゲノム情報を解析し、他の患者の情報と照らし合わせて病名の特定を目

指す「ゲノム解析事業」が発表された。

iPSバンク事業について、佐藤健人・東海大医学部准教授は「iPS細胞からは筋肉などの組織を作ることができるが、現段階で安全性に疑問があり、当面は治療薬など、難病解明のための研究に役立てたい」と語った。また、事業概要を説明したソルドの小泉二郎代表理事は「事業

を通じて社会が関心を持ってもらえれば」と話した。【山田尚弘】